東方
パフォ合同
お06a

長らく付き添った藍と橙が
一人立ちしてしばらく
平穏な日々を送っていたので
丁度よい退屈しのぎだ
私は八雲紫
最近幻想郷に迷い込んだ
子を育てている
ゆ…紫さん…
さぁ準備はいい？
こら、ママと呼べと
言ってるでしょ？
わっ
八雲紫マッマの
バブミある生活
描いた人／カララテカ・バリュー

そんな悪い子は
躾が必要ね

ああ…
ママ…ママ…

ふふ♥こんなに
えっちに成長して♥

紫ママの手コキで
勃起しちゃってる
ほんと悪い子♥

はぁ…でも、

その勃起したおちんちん
トロトロに熟したママのオマンコで
最後まで面倒見てア・ゲ・ル

こんなえっちな子に
育ててしまった
ママにも責任があるわよね…

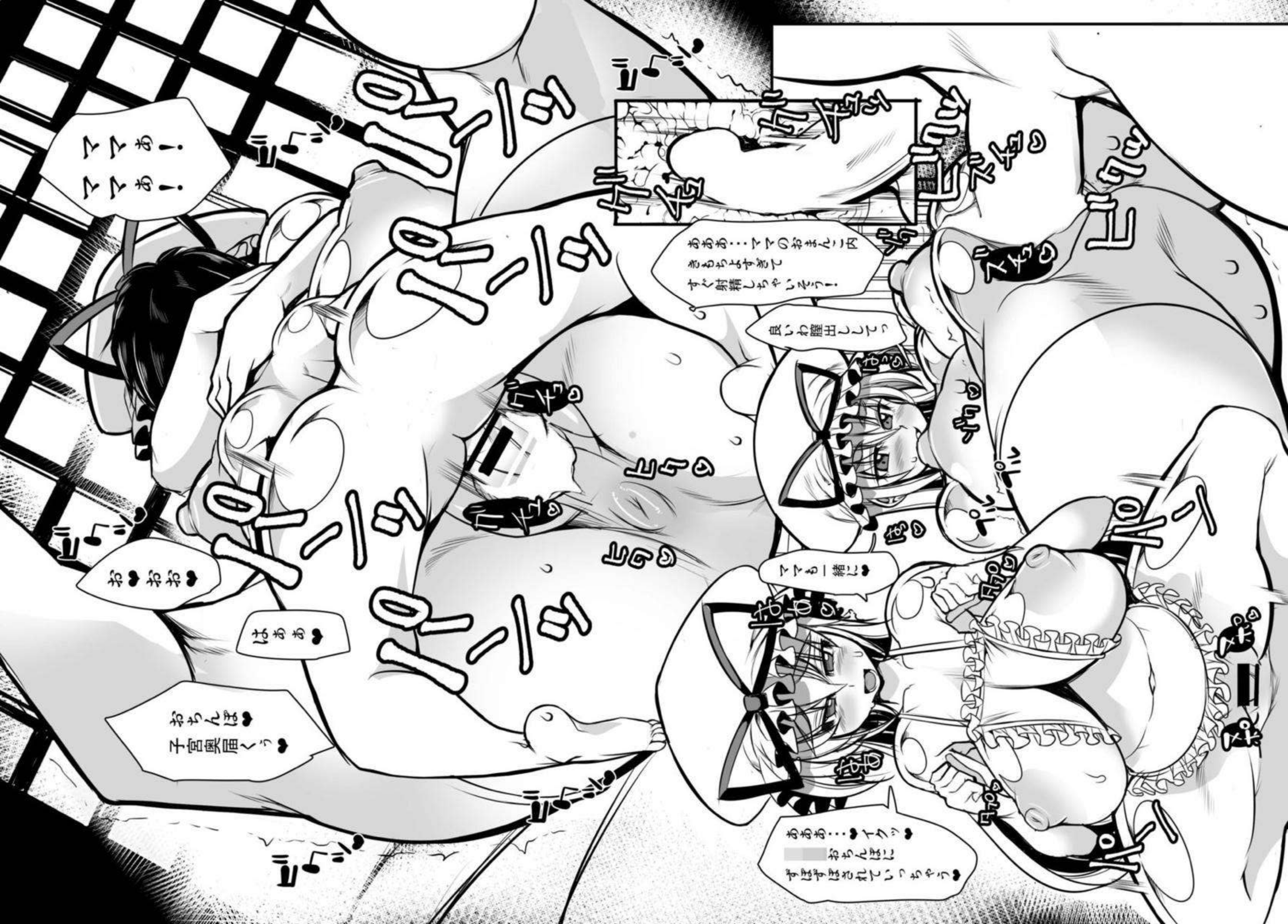
だ・か・ら

ドキ
ドキ

ドキ♥
ドキ♥
ドキ♥
ドキ♥

ドキ♥
ドキ♥
ドキ♥
ドキ♥

ドキ♥
ドキ♥
ドキ♥
ドキ♥


ピーピー
ピーピー
ピーピー

ああああ❤

はぁはぁ❤ママ…❤すごくえろいよ、ママ…

こっこらそんなスキマ広げたら漏れちゃう…❤

ママ、僕、もっとママとおまんこしたい

フフ・手間のかかる子…❤

もう、イタズラきなんだから❤

ママ・ママ…

いいわよ❤たーっぷり甘えさせてあげる❤

様子を見に帰ってきてみればどうしたものやら(藍)

橙とさほど変らない子とえっちしてるのです(橙)

こら、橙みちゃいけません(藍)

おしまい

幽々子様…

やっぱり私、怖いです…

どうしたの妖夢…

……。

まったく…

あなた怖いの苦手なのに寝る前に「13日の法要日」なんて見るからよ。

もう、しょうがないわね・・・

ほら、こっちへいらっしゃい。

ここだったらあの
ホッケーマスクをかぶった
怖い尼さんもこないから。

安心してお眠りなさい？

そうそう、風邪ひかないように
全身を包んであげないとね❤

おやすみ、妖夢

2017.8
TiNON

かわいそうなぞう

（ぬえの）

（前回までのあらすじ）
正体不明の種（ちんちん）が暴走し
不意の射精が止まらなくなってしまったぬえ。
聖はぬえのおむつを当て、
日中のお勤めの間はおむつの中で我慢してもらい
その後に治療をする事になったのだ！

ビクッ
ビクッ
とろぉ…
ボト
ぐっ
ギチッ…

夜、聖寝室

長い間交換できなくて
ごめんなさいね、ぬえ。

気持ち悪かったでしょう？
今綺麗にして上げますね♪

少女
お勤め中…

?

ビクン♡
ビクッ♡
ビチッ♡
ブリ♡

エア巻物の力で肉体強化を自らの乳房に施した聖…
その母乳をぬえに飲ませ精液生成を異常に促進させ出し切ることで射精を治そうと試みるのであった。
どうですぬえ？
何かこみあがってきませんか
あ…聖…で、出ちゃう！
少女母乳生成中…byエア巻物
プルプル…
ピシッ！
ブンッ！
ぐぐっ
むくむく…
どくどくっ!!!
どくどく…
よく頑張ったわ、ぬえ！この調子でどんどん出しましょうね♥ 聖
うん……
鵺ちゃんは女の子射精するわけないので頭の病院に行こう

あら、幽々子ったらまたお漏らししてるわ…
さっきオムツを替えたばかりなのに…これでもう3回目よ……
おっぱいを飲むとすぐにお漏らししちゃうんだから…
幽々子はオシッコの量が多いから、そろそろ交換しないとね
ついでに幽々子の大好きなお浣腸もしてあげましょう
…今日は趣向を変えて、この前買ってきたオマルを使わせて
恥ずかしそうにウンチを漏らす幽々子を見ましょう
でも…ちゃんとオマルにできるかしら…
最近はオシッコもウンチも全部オムツにさせてたし…
まぁ、もし失敗したらオシオキをしましょう…
うふふ…今回はどんなオシオキをしてあげようかしら……

母娘のキズナかっこ仮

挿絵・さーもん　文・守島裕輝

「ほ！お、ぎいいい‼壊れるッ！お股がッ！裂けるぅぅぅぅぅ‼」

分娩台の上で下半身をさらけ出し、苦悶の声を上げるのは輝夜だ。その輝夜がもう一人入れるのではないか、という程膨れあがった腹の下にある女性器は、風船のように大きな腹の内圧によってばっくりと開かれ、粘膜をぼたぼたと垂れ流していた。

「もうやだ！お腹から出して！切っていいからお腹からだしてよおおお‼」

「頑張ってください姫様！ほら、一緒に息しましょう。ひ、ひ、ふー！ひ、ひ、ふー！」

分娩台に四肢と胸の下をベルトで固定された輝夜の横で手を握り、声をかけるのは永琳である。

近くでは鈴仙をはじめとした看護服姿の兎たちが走り回り、産湯の用意などをしていた。

「ぎゃ、ひ、やだ、もう、助けてえええ‼」

「大丈夫！今頭が見えてきた！頑張って」

約６時間前。

「なぁ、永琳。最も優れた月の頭脳さんや。妹紅と輝夜を仲良くする方法は何かないか」

「あるわよ」

永遠邸内にある休憩室。診察室の横にあるそこで、慧音と永琳は小さな丸机に向かい合って座り、湯飲みを傾けながら長いこと雑談を交わしていた。

「何せ千年を越える確執だもんなぁ、一朝一夕でどうにかなるものでもないにしろ。『殺し合う程度の間柄』っていうのはなんとか解決させたいんだよなぁ」

「だから、あるってば」

「……え？」

永琳は丸椅子から立ち上がると、空になっていた二つの湯飲みを取り、壁に備え付けられた棚の上の、よく冷えたヤカンの隣に置いた。

「私だって手をこまねいて見ていただけでもないし、何もしてこなかったわけじゃないわ。強いて言うなら、今から試すのは３６４回目の試行実験ね」

何を言っているんだ。と慧音が口を開く前に、すぱぁん、と襖扉が勢いよく開かれた。

「見て見て永琳！今日は首から下を三千分割して竹林中にばらまいて肥料にしてきてやったわ！」

うれしそうに報告するのは血まみれ輝夜で、手には生首になった妹紅の頭がぶら下がっていた。それを見た慧音は叫びを上げ、椅子から転げ落ちた。

ふーふー
ふーふー
ぎゅっ
ぎゅっ
ぎゅっ

「わあああああああああ!!」
「素晴らしいです姫様、相手大将首を持ち帰り、さらにはそれによって敵方を萎縮させるのは戦の基本ですから」
腰を抜かした慧音を尻目に、永琳は輝夜に近づき、片手で肩を叩く。永琳の言葉にふふん、と輝夜は鼻を鳴らし
「そうでしょう。それにできるだけ復活できないように念入りに殺したからね！」
薄い胸を張る。永琳は二度、うんうん、と頷くと、どこからかメスを取り出した。
「でもね……」
そのメスを自然な動作で輝夜の腹部に差し込む。恐ろしいほど鋭利に研がれたメスは音もなく刃が沈み込み、
「来客中にそーゆーことしちゃだめって言ったでしょうがアーッッッ!!」
永琳が勢いよく手を下へ振り抜くと、服ごとその下の輝夜自身の身が切られ、ぱっと赤い液体が飛び散る。
「わあああああああああああああ!?」
再び慧音が叫びを上げると同時、永琳は混乱によって硬直した輝夜の手から妹紅の首を奪うと、輝夜の切れ目から妹紅の頭を身体の中に納めてしまう。そして自らの髪を一本引き抜き、それをポケットから取り出した縫い針に通した次の瞬間、瞬く間に縫合してしまった。
「は、あ……え？」
時間にして十秒も無かっただろう。一呼吸分にも満たないうちに、突如として輝夜は頭一つ分膨れた、それこそまるで妊婦のような腹になってしまった。蓬莱人の快復力によるものか永琳の技術によるものか、縦にまっすぐ入っていた赤い線も、瞬き一つの間に消えてしまい完全に妹紅の頭が輝夜の身体に取り込まれたところで、
「ちょちょちょちょっとおおおおおお!!何やってるの永琳よりにもよってあいつの頭を私の中に入れるなんてえええ!!」
正気に戻った輝夜に両肩を掴まれ揺さぶられる永琳だが、その顔は先ほどの輝夜にそっくりの勝ち誇ったような表情であった。ふふふさすが私、とか言っているが首ががっくんがっくんしているので何を言っているか判別しづらい。
「え、永琳、本当になんでそんなことを……？」
まだ足腰は立たないが流れる血もなくなったことでちょっと落ち着いた慧音は永琳に問いかける。
「これがその仲良くする方法。輝夜に妹紅を出産させることで仲むつまじい母娘になってもらおうと思ってね」
「永琳!!あなたほんっっっっっっと突発的にろくでもない発案を試すの止めなさいよ!!」
ああ、以前もこんなことがあったのか、と慧音は納得してしまった。確かに永琳ならやりかねない。
ひとしきり揺さぶり疲れて肩で息をしている輝夜の腹を、永琳が撫でる。と、撫でるのに合わせて、むくりと腹が少し大きくなった。
「うぶっ……えっ、ちょっとまさか……」
「思った通り。身体の方が粉々だから、一番大きなパーツで

ある頭からリザレクションが始まったようね」
「それって、私のお腹の中で妹紅の身体ができあがって行くってこと……？」
青ざめながら問う輝夜に、永琳は笑顔で頷いた。
ひ、と輝夜が一歩後ずさった瞬間、まるで風船を膨らますかのように、輝夜の腹が膨らみ始めた。
「そん！なの！やだあああああああああ!!」

それから輝夜の腹の中で妹紅はすくすくと育ち、
「ぎゃ、ぎいいいいいいい!!」
輝夜の股を押し広げながら生まれ出てきた。

やや大変なことになっていた輝夜の股は永琳の処置によりすぐに回復し、患者用のベッドに寝かされていた。そしてそのベッドの横にももう一つ、やや形の違うベッドが並べられている。
「ぐぅ、くそっ、輝夜、殺す……」
四方が柵で囲われた、やや小ぶりなベッドには妹紅が寝かされていた。本人はなんとか起き上がろうとしているが、やたら体積の大きいもこもこしたオムツを付けられてしまっていることで脚が閉じなくなっており、さらに両手は花柄のあしらわれた布のミトンがかぶせられており、手を使うということもできなくなっている。
よだれかけまで付けられている妹紅は、じたばたと身をよじり脱出を試みるが、手も足も満足に使えない状況では高めの柵を乗り越えることは到底できそうになかった。
「くっそ、こんな辱め、絶対ゆるさん……」
「私だってやりたくてやったわけじゃないのにぃー……」
おおよそ半日ほどの時間で妊娠から出産をこなした輝夜は蓬莱人といえど体力を消耗しており、妹紅と違ってベッドの上で身動き一つ取らずに横になっていた。
そこに入ってきたのは、お盆を片手に載せた永琳だ。
「――うん、母子ともに健康そうでなにより」
「……これが健康に」
「見えるものかな……」
「それだけ言えれば十分元気でしょ」
白衣姿の永琳は輝夜のベッドに腰掛けると、盆に載せていたコップを、ベッドに身を起こした輝夜に手渡した。白い液体がなみなみと注がれたコップを前に輝夜しばしためらうが、喉の渇きもあって一息に飲み干す。
「あら、なんだかずいぶん甘い牛乳ね」
「産後の母体にも新生児にも飲ませられる特別製だからね。それだけを飲んでいても生きられるわ」
空になったコップをしげしげと眺めていると、隣のベッドから柵を叩く音が聞こえた。
「なー私もお腹すいたし喉が渇いた。その牛乳でいいからち

ようだいよー」
「もともとそのつもり。でも、あなたは今輝夜の赤ちゃんだから」
赤ちゃん、という言葉に妹紅が身を引いて顔をしかめる。
「うえっ、ほ乳瓶とか言うんじゃないだろうね……」
「いいえ、私は母乳育児派なの」
そう言って頷いた永琳は、突然輝夜の着ていた病衣を掴んではだけさせた。
「ちょっと！今度は何を――」
「形式上でも、ちゃんとおっぱいあげるのって大事だと思うのよね」
直後、牛乳輸送缶を載せた台車を、鈴仙と慧音が押して入ってきた。心なしか、慧音は顔が赤いような気がする。
二人は台車を輝夜のベッドの横にまで押してくると、声を合わせて輸送缶を床に降ろした。缶の側面には二斗と書かれていた。
「おいおい、いったい何人で飲むつもりなんだ。ミルクで出産祝いでもしようっての？」
「それも面白そうだけどね。今からこれを詰め替えるからちょっと待ってて頂戴」
つめかえる、という言葉に妹紅も輝夜も疑問を浮かべていると、缶の蓋が空けられ、そこに灯油をくみ上げるポンプのようなものが２つ差し込まれた。ポンプから伸びる管の片方は缶の中に、そしてもう片方は永琳が持つと、輝夜に向けた。
「ねぇ、まさか、つめかえるって……」
「もう一度言うけど、私、母乳育児派なの」
片手で輝夜の薄い胸、その先端を掴むと、ポンプから伸びる管をぐっと押しつけた。痛がる輝夜を鈴仙が抑えている間に更に管を強く押しつけると、その先端が乳首から中に入っていった。
「いやいやいや！なんでそんなのが入るのよ!!」
「母は偉大なのよ、輝夜」
意味がわからないわとわめく輝夜を無視して、もう片方の胸にも管を差し込むと、慧音が両手で二つのポンプをぎゅっと握る。空気と液体が混ざるような音と共に中の牛乳がポンプの中にくみ上げられ、更にもう一度握ると、くみ上げられた牛乳が管を伝い、輝夜の胸に流れ込んだ。
「えっ、ひゃ、ひぃ！」
ぎゅぽ、ぎゅぽ、とポンプが握られる度に輝夜の胸に牛乳が流し込まれ、むくむくと大きくなっていく。
「大きな赤ちゃんに合わせて、サイズは大きめが良いかなと思うから全部入れるわよ。頑張ってね」
「これ全部!?そんなに詰め込んだら破裂しちゃうでしょ！」
「まぁ……そのときはそのときで」
「えーーりーーん!!」
結局、大量の牛乳も５分ほどで輝夜の胸に注ぎ込まれ、元々小さかった胸を無理に膨らませているのもあり水風船のように丸くぱつんぱつんに張り詰めていた。
「お、重っ。ちぎれる……」
片側だけで頭ほどある胸は輝夜の両腕によって支えられ、

その腕に圧迫されることで先端から白い液体が滴っていた。
「ほーら、準備できましたよもこうちゃん。お腹いっぱいミルク飲みましょうねー」
「赤子扱いするな!!」
柵の金具の一部を永琳が外すと、輝夜のベッドに近い側の柵が下に滑って開く。出られるようにはなったが満足に動けない妹紅は、なすすべもなく左右から鈴仙と慧音に抱えられた。
「なぁ、慧音ってば、これなんとかしてくれない?」
「紆余曲折はあれど、私はおまえと輝夜には仲良くして欲しいからな。永琳の方に乗らせてもらうぞ」
「そんなぁ……」
輝夜のベッドに移動させられた妹紅は、ちょうど輝夜の膝の上に座るような姿勢で固定させられた。
「うう、本当にここから飲むの?」
「別に飲まなくても良いけど、あなたお腹も空いて喉も渇いてるでしょ。だったら赤ちゃんらしくお腹いっぱいのむといいわ」
ほらほら、と永琳に急かされる妹紅。確かに、目が覚めてからさほど時間は経っていないがそれまでずっと飲まず食わずだったのだ。目の前の、ぷっくりと膨らんだ乳首からしみ出したミルクは甘い香りを放っており、くう、と腹が鳴った妹紅は、両の手を頭ほどある大きな胸に当て、乳首に吸い付いた。
「ひゃ、うううう……」

輝夜の出す声に妹紅も恥ずかしくなってしまうが、それでも空腹と乾きには代えがたい。ぢゅ、と吸い込むと、乳首から吹き出したミルクが口の中を満たし、そのまま飲み下した。味わう余裕もなく胃の中に落ちていったが、口の中に残る濃いけれどもさらりとした甘さを、もう一度味わいたくなって、更にちゅうちゅうと吸い続けた。
たぷたぷ、と腹の中でミルクが波打つのがわかるほど吸い続けても目の前のおっぱいは尽きないようだ。が、
(ヤバい……めっちゃおしっこしたい……)
いきなり大量の水分を取ったことで、たぷたぷの腹より更に下のあたりで水の気がしてきた。だが、この状況、頼んだところで厠に行かせてくれるはずもないだろう。そして、今自分を不自由にしている原因の一つであるオムツのことを思い出した妹紅は、乳首から口を離さないまま、しゃあああああ、とオムツの中にお漏らしをしてしまった。
(うう、こんな歳にもなって……)
「あ、あのさ、妹紅……」
ちょうどお漏らしをしたタイミングで呼ばれ、心臓が跳ね上がるほど驚く。
「あのさ、こっちのおっぱいも張って苦しいから、こっちも吸ってくれないかな……」
恥ずかしそうに告げる輝夜に、乳首から口を離すと確かに今まで吸っていた胸と一回り以上大きさが違っていた。
「あ、ああ……」
すでに満腹ではあったが、不思議とまだこのミルクなら飲

めそうだ、と妹紅は反対の乳首にも口をつける。張り詰めたままであった乳房からは、勢いよくミルクが噴き出して来たが、母乳を吸うのに慣れてきていた妹紅は、先ほどよりも速いペースでごくごくと大量のミルクを飲み込んでいく。

ため込んだ分はもちろん催してしまうが、それも二度目以降はあまり気にならなくなっていた。

さすがに苦しくなって口を離すと、ちょうど左右の胸が同じくらいの大きさになっていた。代わりに、大量の母乳を飲んだ妹紅の腹が、妊婦のように膨れあがってはいたが。

苦しさに、ちいさくげっぷがでたところで、

「ふふ、ありがとね、妹紅」

不意に、輝夜に頭を撫でられた。いつもなら払いのけるのも造作はないが、今日はむしろそれが心地よく。満腹も手伝って、妹紅はそのままうとうとと眠りについた。

「結局、あまりうまくいかなかったなぁ……」

永遠邸内にある休憩室。診察室の横にある部屋で、慧音と永琳は小さな丸机に向かい合って座り、今日も湯飲みを傾けながら雑談を交わしていた。

先日と違う点としては、割と近いところで爆発音のようなものが響いている、というところか。

「毎度のことだからね。多少仲良くなったところでまたすぐに元に戻っちゃうのよ」

あれだけやってもかー、と、慧音は椅子の背もたれに体重を預け、天井を仰ぎ見た。

「ただ、それが続く期間とか、どれくらい仲良くなるかとかはその時々によって違うから、結構飽きないのよね」

「ううむ、なんというメンタリティ……」

そろそろ冷めつつある湯飲みを傾け、長い息を吐く。

「実を言うと、新しい案もあってね。これから試そうと思うのよ」

「ははぁ、次はいったいどんな妙案を？」

また突拍子もないことをやり出すだろうが、先日ほど驚かされることもないだろう、と腹をくくった慧音は、あえて永琳に尋ねてみる。

「今からちょっと準備してくるから待ってて」

と、そそくさと永琳は部屋を出て行った。

しばらくすると、外で二人の暴れている音が止んで、しん、と静まりかえっていた。静かになったことで、ぱたぱたと永琳がこちらに近づいてくる音も聞こえるようになっていた。

「前回はほら、母子になってもらうことで仲良くなってもらおうとしたでしょ？だから、今回はちょっとだけ方向を変えて……」

ス、と戸が開かれると、

「輝夜と妹紅に、双子の姉妹になってもらおうかと思って」

ずっしりと大きな腹を抱えた永琳が立っていた。

あとがき

どうも、God Hand Marです。長いので気軽にマーさんと呼んでください。そう呼ばれると嬉しさで頬を染めてしまいます。
唐突ですが、ゆかゆゆのカップリングは正義だと思います！あの二人がキャッキャする姿は想像しただけでニヤニヤがとまりません。さらに幽々子様が紫様にオムツを当てられたとなると、それはもう「メチャシコ」としか言いようがありません！　ゆかゆゆ最高ッッ!!!!
…ちょっと取り乱してしまいました。
そんな想いを込めたイラストなので楽しんでいただけると幸いです。

God Hand Mar

このたびは
おさそいいただき
ありがとう
ございました

説明不足な絵で
すみません …→

2017.08 ちのん

どうも、狂華です。
今回は母性をテーマにということでしたので愛に包まれる…
おっぱいベットやな！ということで描かせていただきました。

あたかかく、フェチに響く作品になったらなと思います。

でも幽々子様のおっぱいだとふんわりひんやりしてるのかなぁ

超特大ミルク風船霊夢ちゃんの
おっぱいから出てくる母乳を飲みたい

守島

このようなシコい企画に
挿絵だけでもご参加できて良かったです!!
次回があれば是非とも本格的に
ご参加させていただきたいです!!
(´ ; ω ;)

さーもん

中村あぞ

はじめてメインの主催として立ち回り、
そいつはひどいどこまでも胡散臭くて
安っぽい合同誌になったかもしれませんが
皆様の素敵な原稿のお陰で。
僕にとっては宝物の一つになりそうです。

みなさんありがとうございました。

はじめまして、「布おむつ娘が大好き」
なdia75と申します。
今回は表紙の下絵のみ参加させて頂きましたが、
お見知りおき下されば幸いです。
今後とも宜しくお願い致します。
Twitter：@062dia75

dia75

発行：2017年　8月11日
発行人：中村あぞ/Kanchela
発行サークル：オーネグス　NIJUSEI
原作：上海アリス幻樂団(ZUN)
Email:dranco@hotmail.co.jp
URL：http://ohnegs.blogspot.jp
印刷：

さんかしゃ
いちらん

dia75

God Hand Mar

カラテカ・バリュー

狂華

ちのん

さーもん

守島裕輝

あぞ